第25回

テーブルのカタチ

近畿大学　建築学部
准教授　　山口　健太郎

【経歴】
京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て 2008 年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011 年 4 月より現職。
特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

食堂は食事の場であると共に団らんの場でもある。食事を楽しみ、会話を楽しむ。食堂での会話はテーブルを囲み行われる。ゆえにテーブルのカタチは、コミュニケーションに影響を与える。標準的なテーブルのカタチは 0.9m×0.9m程度（4 人掛け正方形）もしくは 0.9m×1.2m程度（4 人掛け長方形）となる。この寸法は一人前の料理に必要な広さに加えて、円滑なコミュニケーションの距離とも関係している。文化人類学者の E.T.Hall(1966)は、人間どうしの距離にはコミュニケーション機能があると考え、人間同士の距離を以下の 4 つに分類した。

密接距離	約 0.5m未満 (18in)	強い愛情や怒り以外は接近しない距離
個体距離	0.5m～1.2m (18in～4ft)	会話を行う距離 会話をしない他人同士は気づまりになる距離
社会距離	1.2m～3.0m (4ft～10ft)	会話をしようと思えばできる距離 他人同士の接近限界
公衆距離	3.0m以上 (10ft 以上)	相手を知人と認め、表情が分かる距離 挨拶を交わす距離。

※距離は体の中心間距離

E.T.Hall、かくれた次元、みすず書房、1970 年

この分類に従えば、日常的な会話には個体距離、用談などには社会的距離、講演などには公衆距離が適している。例えば、国同士の交渉の際には、適切な社会距離を保つ必要があり、テーブルとテーブルは離して配置しなければならない。では、ここで日常会話の距離を示す個体距離とテーブルの大きさの関係

性について考えてみたい。上記の 90 ㎝角のテーブルの場合、体の寸法（20 ㎝×2 人）にテーブルの大きさ 90 ㎝を加えると、向かい合う人々の距離は 1.3ｍとなり、ほぼ個体距離と同じ大きさになる。このように標準的なテーブルの寸法は個体距離を満たすように作られている。

ここで高齢者施設に目を向けると、施設によっては多角形のテーブルや、認知症の方が前の人の食事を間違って食べてしまわないようにあえて大きなサイズのテーブルを導入しているところもある。いわゆる問題行動の防止や、レクリエーションのためには、このような形状の方がよいのかもしれない。だが、コミュニケーションという観点から見れば向かう人との距離が個体距離を越えてしまうと会話が成立しなくなる。さらに、耳が遠い人は、より会話がしづらくなる。

次に食堂の雰囲気という点からテーブルのカタチについて考えてみたい。食堂をカメラで撮影した場合、建築は「地」、インテリアが「図」となる。食堂の雰囲気は、テーブルとイス、そして、照明のデザインにより左右される。多くの建築家はルイス・ポールセンの照明や、ハンス・J・ウェグナーのＹチェアを好んで取り入れる。それは、北欧ならではの洗練されたデザインが空間を引き締めてくれるからである。これらの家具は使い心地としても優れており、高齢者施設でも十分に活用できる。

このような空間の雰囲気を高めてくれる家具がある一方で、施設では雰囲気を損ねる家具や、空間の用途と一致していない家具（例えば図書館や学校を想起させるような家具）も散見される。特に車いすに設置するタイプの一人用テーブルは、テーブルというよりもトレイに近く、一人で食べている姿は寂しさを感じさせる。恐らく一人用テーブルを利用している人には、認知症による周辺症状や人間関係のもつれから一人で食べる事の方が望ましいというケア上の判断があるのだと思う。だからと言って、これらの人々から食卓自体を取り上げるのは問題があると思う。レストランやカフェでも一人で利用している人はいる。だがその姿に寂しさを感じるわけではない。同じカタチのテーブルが並んでいる中で、それぞれの人間関係に合わせて一緒に食事を営む人を決めている。同じ条件下の中における個人の選択であるがゆえに、阻害されている感じを受けない。施設においても同様で、6 人掛けや 8 人掛けのような大きなテーブルは選択肢の幅を狭めてしまう。そこで、小さいテーブルを複数設けると選択肢が広がる。個人的には正方形タイプの 4 人掛けテーブルが望ましいと考えている。正方形であると１人でも違和感なく利用でき、これらのテーブルを並べると大人数でのイベントもできる。ユニット型であれば３台（できれば４台）のテーブルを設置するとよいだろう。